

ぱ ろ す

四季の会・ユーザーズ・サービス

240号

発行人 浅沼 邦夫

拝啓 春たけなわの候、先生におかれましては益々御活躍のことと存じます。

今、東京も地方も、**大変厳しくなって来たようです。これからは、本物志向が一段と大事になって来ました。どんなものでも、偽物は駄目です。**大工道具などでも、100円均一で買って来た「ノコギリ」で切っても、一応木は切れるんです。大工さんの「ノコギリ」を貸してもらおうと切れ味が全然違うんです。大工さんの「ノコギリ」は、見掛けは同じだけど、切った時全然違います。やっぱり、これからは、そういう差がビジネスになる時だと思ふのです。本物の世界の話です。

会計事務所は地域で生きている。地場産業です。御用達の仕事をしているところは、ビジネスを増やすチャンスだと思ふのです。

これからは、生活も企業経営も厳しくなってくるようです。だから、より賢い消費をするようになってくると思います。「モノ」は高くなるかも知れません。しかし、ソフトウェアやサービスは、過当競争となるかも知れません。人々は自然との共生(コミュニケーション)といったことを盛んに求めています。デジタル、ITに偏ったビジネスは難しいと思ふのです。ITだけで何かやろうと思っても、なかなかついてこれないところがあるのです。もう少し「アナログ的」なものと組み合わせていきたいと思います。本物の魅力にならないと思ふのです。長く付き合いたいお客様。縁者・恩人・親派のネットワークなど、「これからはお客様を大事にしていけないと!また、付き合いたくても付き合えなかったお客様!当然できる新規のお客様!」を大事にしていくのです。御用達に徹して、お客様のために、「あつらえる」というビジネス。他の会計事務所との「ちがい」をもって対応ができる。更に、もう一段徹底的にやらないと難

しくなる時代です。自己満足でなく、お客様こそ、お客様満足。「会計・税務・診断」に磨きをかけることこそ何よりも大事かと思ふのです。

脳が活性化しないIT社会

脳力革命「文芸春秋」5月号で川島隆太教授がこんなことを書かれている。『ITの発達した現代は、人類史上初めて、脳の機能をコンピュータなどに代替させることが可能な時代です。これは逆に、生活の中から脳を鍛える機会がどんどん失われている時代だともいえます。』

いま大人が漢字を書けませんね。パソコンを使っているから手で書く必要がなくなり、忘れてしまった。IT社会の中で漢字を思い出すという脳のネットワークが退化しつつあるのです。ハードウェアの進化が脳を活性化する機会を奪ってしまった。昔は会いに行かないと話ができなかったのに、それが電話となり、最近はメール。皆さんの周辺にも隣の席の同僚にメールを送る人がいませんか。面倒くさがらずに顔を見てコミュニケーションし、非言語的メッセージを受けとる。これが脳の活性化には大事です。

他にもあります。携帯電話が普及してからは電話番号を覚えるの必要がなくなってしまった。だから記憶力のトレーニングができない。計算も同じ。買い物に行くと支払いをしてお釣りをもらう。以前ならお釣りの額が合っているか暗算しましたね。ところが今は売るほうも買うほうも計算はレジまかせ。

人間という生き物は楽なものが出てくると、面倒なものは回避してしまう定めなのかもしれません。もし江戸時代のように車がなくてどこへ行くにも歩いていたら、毎朝、ジョギングしようとする人はいないでしょう。いまの時代、脳もゲームやドリルなど特別な仕組みがないと、なかなか鍛える機会がない。ここが難しいところです。

脳を鍛える「3つの原則」がある。1つは人との対話のコミュニケーション。相手の表情や身ぶり、口調などさまざまな非言語的コミュニケーションにより情報を得ています。2つは目的を持って指を使うこと。料理を作ったり、絵を描いたり、楽器で演奏するなど、目的を持って指を動かさないといけないのです。

3つは「読み・書き・計算」の黙読ではなく音読です。そこで大事なことは、「脳トレ」で全身運動をすることです。読み・書き・計算を中心とした「脳トレ」は、ジョギングのような全身運動だといえます。毎日続けることによって基礎体力が上がるし、ウォーミングアップにもなる。一方、集中して読書したり仕事をしたりという行為は、野球やサッカーといった競技をするようなものでしょう。ですからまず「音読・計算」でウォーミングアップをして、それから読

書なり勉強なり、自分の目的に応じた活動に取り組むのがよいでしょう。』

我々には「簿記」がある。「簿記」を強くすると「直感・ひらめき・高いセンス」を持つことになるのです。

ベトナムで複式簿記へ 簿記はビジネスの武器

4月11日、日経で「ベトナムで複式簿記普及」が出ていた。『元国税庁長官や簿記専門学校トップらが非営利組織(NPO)を設立し、ベトナムで複式簿記の普及に乗り出す。日本企業に勤めるベトナム人向けにハノイ市で教室を五月に開く。ベトナム人による簿記学校開設を後押しし、企業経営の近代化を応援する狙い。名称は「ベトナム簿記普及推進協議会」。』

日系企業など約六十社が進出するハノイ市の「タンロン工業団地」に教室を五月中旬に開き、日系企業に勤める経理担当のベトナム人社員約三十人を教える。日本式簿記三級レベルの教育を週二回、四カ月間、日本語で教える。授業料は一人月二百ドルほど。日本人幹部や現地の税務当局者へも教育対象を広げる。

ベトナムは税制改革を推進中で、進出企業の経理担当者に簿記の原理を理解させ、税務調査が入った場合にも対応できるようにする狙いもある。**推進協議会はベトナムの税理士資格の取得試験に日本式の簿記の出題をするよう働きかける」とのことです。**

簿記は武器。「ビジネスの言葉」です。簿記は、カネの収支を「どのような理由で」「どれだけ使い」「いくら収入があったか」を右側(貸方)と左側(借方)の、プラスマイナス計算で、記録することです。

「取引」と呼ぶカネの出入りを、「仕訳」という作業で分類(勘定科目)し、最終的に損益計算書と貸借対照表という決算書を作成するのです。

会計の本質は「仕訳」である。1つの取引(出来事)について、2つの情報を記録(借方と貸方)することです。頭の中に仕訳のイメージを持つ。「直感」を持つ。社長への対話は数字がベースになっていく。ビジネスは数字との戦いであるのです。

簿記の基本をしっかりと持つ。決算書には3つの目がある。特に税務署の目はプロ中のプロである。「仕訳がどこでなされていたか!」「仕訳がどこかでなされている筈なのにない!」。大局観を持ち、大づかみでみる事も大事。また薄く切ってみる。その都度見ることも大事。数字を読み、活用するのも「簿記」なのです。

コンプライアンスが大事です。パソコン経理だけではないのです。時代が求める簿記。企業への即戦力の証です。簿記(数字)を強くすると、経理の「直感・ひらめき・センス」をもつことになるのです。簿記は世のため、人のためになり、会社のため、国家のために尽くすことになるのです。